

2018.12.1

現代俳句千葉

131号

巻頭エッセイ

1 + 1 を 3 に

編集長 徳吉 洋二郎



俳句を始めたのは定年退職後のカルチャー教室である。先ずパソコン、続いて写真のコースを終え、次に選んだのが俳句。この三点セットで写真俳句を作り、旅行の楽しみを増やそう、というのが目的であった。

少し俳句らしいものが作れるようになって、教室に写真俳句を持って行く講師から「良い写真だね、俳句が無いともっと良いのだけれど」「写真の説明としては写真に失礼、これでは1+1=1だ。1+1を3否4にでも5にでもするのが写真俳句である」と厳しい指摘を受けた。

確かに写真は省略であり、俳句も又然り。この二つの省略をぶつ合わせて、見たことのないもの、見えるはずのないものを見せるのが写真俳句。即ち写真俳句は写真と俳句が一見離れているからこそ、その情景を想像したくなる、どこまで曝け出すか、全部見せたら終わり。

と云って、そのような俳句がすぐ創れるわけではない。そこが俳句の難しさであり、楽しさなのか。

丁度写真俳句の走りの頃でデジタルカメラの普及と相俟って広まっていた。そんな中、写真家の浅井慎平と作家の森村誠一の「写真が先か、俳句が先か」の論争もあり。又写真俳句関連の本も多数書店に並び、伊丹三樹彦の写真集「日本春景」「秋彩」「夏色」と出版された。これらに触れることにより写真俳句について少しずつ理解が進んでいった。私は写真を撮ってその説明を俳句で付け加えることから入ったので、どうしても写真の説明で終わり、1+1=1にしかならないのだと反省、一旦写真俳句を封印し俳句に専念することにした。

以来十年、カルチャー教室、結社句会、当協会の句会で多くの俳句を作り、多くの人の俳句に触れてきた。やっと俳句の持つ力が分かってきたような気がしている。

そろそろ封印を解き1+1=3の写真俳句に再チャレンジしよう。

目次

1 + 1 を 3 に 徳吉洋二郎	1
秋の吟行会	2~3
諸家近詠	4~5
私の感銘句	6~9
津田沼研究句会報告	10
青葉研究句会報告	10~11
柏研究句会報告	11
ひろば	12
新会員・会友紹介	13
会員・会友の近況	13
掲示板	14

千葉県現代俳句協会会報

秋の吟行会

レトロな城下町「君津市久留里」巡り

会場 上総地域交流センター 平成三十年十月二十九日(月)



ボランティアガイドさんの案内で散策

久留里は内房線木更津駅から単線の久留里線に乗り換えて四十分ほどの場所にあった。一行の一部は久留里線車中すでに吟行を始めていたようだ。雪の富士が見えたという。東京湾を越えた富士ということか。そう言えば朝から秋の良い天気だった。

十時過ぎには、交流センター三階の会場に参加者が詰めかけた。六十三名の参加者は受付を済ますと会場前の広場に集合、町の数名のガイドさんの説明に従い、城下町の雰囲気を感じ、立ち止まっては句を詠んだ。久留里は湧水の町。清澄山系に降った雨が地下水脈を通過し、水が湧きだすという。素晴らしい。千葉県で唯一の「平成の名水百選」の地なのだった。一行は行く先々で湧水のご馳走になった。それが句にもなった。久留里は『里見八犬伝』とも縁の在る城下町だった。ガイドさんを先頭に各グループの辿る細道は古道、城下の道を感じさせた。



真勝寺でのおもてなし



新井白石 居宅跡



久留里の 銘水

城主黒田家の墓を抱える真勝寺で温かいおもてなしに出会った。熱いコーヒーが喉を満足させてくれた(奥様の金澤さんも句会参加者の一人であった)。柿を狙う猿にも出会った。自然の豊かな土地であることを思わせる。かの新井白石の居宅跡を観た。坂があった。路の傍らには赤ままの花があり、草紅葉が始まっていた。吟行後の句会で明らかにすることだったが参加者はそれらも詠んだ。午後一時過ぎに始まった句会は和やかであり、同時に緊張感も漂わせていた。他の参加者の見事な表現に感嘆すると共に、やはり自分の句が気になった。自分と同じ情景を歌いながら、なるほどこう詠むのかと感心し、未

熟な自作を見る。そんな心理がどなたにも働いたかも知れない。(いや筆者だけだったか)。披露、特別選者による講評、表彰と時間は経過した。秋尾会長の現代俳句についての鋭い講評は刺激的であり、秋の吟行会の句会場は大いなる勉強会の会場に化していた。

司会 徳吉洋二郎・木之下みゆき
披露 高橋健文・星野一恵・羽村美和子 (高橋宗史記)

〔一〕二十位入賞者作品 (二句のうち一句)

- ① 儒者もるる井戸掘りもるる秋うらら 檜垣 梧樓
- ② 鶴来て人来て神の水を飲む 高野 春子
- ③ 山栗の獣臭きを拾ひけり 高橋 健文
- ④ 秋城下ひねもす水をよくしゃべる 村田 満枝
- ⑤ 名水の桶一杯に秋の空 広上 あい
- ⑥ 久留里線つぎの停車は小春です 保坂 末子
- ⑦ 横井戸は秋思の暗さ真勝寺 石井紀美子
- ⑧ 釣瓶なき滑車の孤独小六月 片岡伊つ美
- ⑨ 水脈という弾力秋の交差点 市川 唯子
- ⑩ 房総の臍くるりくると秋日傘 池田 博臣
- ⑪ 新豆腐久留里は水の美き町 中里 結
- ⑫ 名水は名水の音茶の咲けり 木之下みゆき
- ⑬ 水はころ上総の秋はやわらかい 秋尾 敏
- ⑭ 秋光が久留里の秘話を掘り起す 山口 明
- ⑮ 鳥わたる時間が見える水の町 長濱 聰子
- ⑯ 秋うらら振舞水がよく喋る 加藤 法子
- ⑰ 小春日や異国にもあり上総掘り 渡辺 澄
- ⑱ 秋の水飲む度にある尾の疼き 羽村美和子

⑱ 名水の秋の光を掬い取る
橋口 久子

〔特別選者特選句〕

(秋尾敏会長 特選)

儒者もゐる井戸掘りもゐる秋うらら
檜垣 梧樓

(渡辺澄副会長 特選)

秋高し鉄路横切る正源寺
山崎 幸子

(並木邑人副会長 特選)

薄光ればあのこのしつぽ見える
三宅たくみ

(檜垣梧樓副会長 特選)

小春日や異国にもあり上総掘り
渡辺 澄

(高木一恵副会長 特選)

水貫ひ秋の遍路となりにけり
檜垣 梧樓

〔その他作品〕 (二句のうち一句、受付順)

一人来て城主の墓に柿一つ
金澤 恵子

天高し久留里城への男坂
森 孝子

水の秋おっぱい銀杏は若木抱え
高木 一恵

三万石の城下名水秋澄めり
國武 和子

六地藏優しく撫でて秋うらら
坂本千恵子

高き枝花梨自由に空使う
菊地 喜己

酒蔵の煙突のびる竹の春
イザヘル真央

水の味分からん古来の柿たわわ
並木 邑人

雪の富士みたかみえたか久留里線
小林 実

秋の水こころの壁に沁みるまで
高橋 宗史

名水を研きあげたる金秋
星野 一恵

小春日やくるりくるる竹とんぼ
細野 一敏

久留里秋天やすらぎと光満ち
なかもと淑子

新走りおいしき醸す生きた水
内田 正成

銀杏にこつんと撃たれ城下町
徳吉洋二郎

地下流るる青き時間や水の秋
越野 雄治

白い嘘くるり反転赤のまま
平岡 育也

久留里城落葉が風を誘導す
野口 京子

房総半島のへそにゐる穴惑ひ
増田 豊子

櫓田の車窓手を振る運転手
森井美恵子

公孫樹もみじ樹洞につまる五百年
田沼美智子

銘水の湧き立つ城下天高し
齊藤 鈴子

いにしえの久留里大井戸天高し
泉 志眞子

茶の花の薬の黄著ぎ上総かな
中村 博子

吟行と遠足園児同車して
棗 楢伊

久留里とは歴史を辿る秋吟行
高橋 博

水源を出でて秋天損なわず
林 阿愚林

幾春秋の目覚め名水さわやかに
田村 隆雄

古井戸の南京錠や烏瓜
富澤ムツ子

白石の居跡秋声しのび入る
小林 俊子

大井戸の澄みてやわらか柿紅葉
末廣 陽恵

まひるまの坂の明暗お茶の花
藤田 富江

野菊にも歴史の香り城の町
大地 節子

雑念の白紙にもどる秋久留里
安田 政子

秋風にコーヒーの香眞勝寺
平野喜久枝

山門に留まる秋日自噴井
笈沼 早苗

美男葛黒田の殿が顔を出す
齋藤 和子

里見家に息づく榎檀大見栄
三上 啓

水脈を示す矢印次郎柿
島 隆史

竹林のくらし奥あり秋の声
鈴木まんぼう

渋皮煮買ひて吟行おわりけり
夏目 道子



句会場風景



秋尾会長と
上位入賞者 (左より)
秋尾 敏 会長
高野 春子 さん
檜垣 梧樓 さん
高橋 健文 さん

◆平成三十一年新春ミニ吟行会◆
日 時 平成三十一年一月二十三日(水)
吟行場所 成田山新勝寺と成田山公園の散策
句会場 成田国際文化会館
募集人員 三十名
問合せ先 「ミニ吟行会」係 細野一敏
電話：ファックス 0439-155-15375

諸家近詠

田村 麗

嬰の手が閉じてひらいて春撫む
流れ行く水にもこころ赤とんぼ
秋霖や白黒決めぬ人と居る
破蓮捨てた時間に過去が無い
湯豆腐の角がぐらりとぶつかる夜

中山 皓雪

御慶にも濃淡のあり茜雲
夫見舞ふだけの元日暮れにけり
物言はぬ人に髭伸ぶ日脚伸ぶ
春寒や握り返さぬ手を握る
梅雨の月主亡き白き拡大鏡

高橋 節夫

原爆忌墓標のごとく雲の峰
ピカチウにピカドン想ふ原爆忌
アインシュタインの舌を抜くべし原爆忌
奉安殿跡ビルとなり敗戦忌
ご真影里に古りたり敗戦忌

田端 重彦

一壺天一万尺の登山小屋
堅香子や耀歌の山を目覚めさせ
ブロッケンの妖怪を見て夏惜しむ
源流の滴りを飲む雲の上
雲の峰七十と五や穂高攀つ

富澤さち子

「復幸」の二文字跳ねる六魂祭
受けとめる嬰の心音柿若葉
喝采の薔薇へ傾くピチカート
夏つばめ懐深きおもてなし
ジャズは朱夏自由席なら空いている

津高里永子

恐ろしき大樹の影や水澄めり
凹凸の貝塚遺跡露深し
豊年や縄文土器に火の記憶
霜解けの層に日の斑やチバニアン
千葉に住むわれら師走のチバニアン

徳吉洋二郎

人間を脱ぎ万緑のご真ん中
晩節や南京豆をむき続け
吾と我戦っている残暑かな
陽炎に組みゆく鉄骨大都会
炎天を抜け東京を抜けられず

檜垣 梧樓

春寒料峭顎上げて金与正
きさらぎの石牟礼道子干潟ゆく
ナンプレや春星入れるマス目がない
春光の妻白髪か銀髪か
有縁あれば迂遠もありぬ弥生尽

並木 邑人

困り果てた奴から糸瓜なりにけり
この雨は行間らしい炭用意
煮こぼれる心に目貼して熄む
抜刀の方舟であり枯蓮
聲音は我が倒影か雪暮れて

日野 葉子

体内に春塵少しまぎれこみ
葉桜や主役となりし喧騒後
夏きざす軋む閨節ゆるみけり
一日を少し得して夏至過ぐす
吾亦紅静かに主張通しけり

荒木 洋子

春の雪より星行きの渡し舟
迫害を受けし一本道にキャベツ
小鳥来る誇らしく凡人であり
人生ゲーム鎌鼬加わりぬ
梵鐘のいくたび越ゆる雪の嵩

畠 淑子

栗を剥く縁側の父日のはるか
秋立つや朝の読経のゴスベル調
母といふ一文字無限曼珠沙華
ロダンの膝秋思支へる造形美
焦げくさきも懐かし昭和柿熟るる

浪本 恵子

抽斗に塩あめ残る晩夏かな
湯あたりをしたらしき蚊やよろよろし
うかうかと夏やせをして物忘れ
体力を日々試される百日紅
自転車の淡きライトに草の花

福田志津子

露煮れば祖母の居さうな厨かな
青嵐鳥の声の裏返り
滴りの命一瞬発光す
行合の空去り難き雲の峰
箒目に蝸の声奥の宮

関谷ひろ子

夏山へ突つ込んで行くあざさ号
遠花火電話の奥に響きけり
予洗いもして残る染み夏の果
鳥肌の今沈みけり蝮蛇草
雑踏に俳友の目が涼しかり

自戒ほろほろ朝ぐもりの茶漬
まつさらな今日といふ空合歡咲けり
身中の虫の哀しみ台風裡
ほうやれば安寿の塚の稲穂波
手を撫でる頭を撫でる良夜かな

高野 春子

玉眼の奥にわたしと春の闇
マチユピチュの絵葉書がくる小鳥来る
やや揺れて貝殻草の吐くことば
青空を真二つに裁ち賜高音
あいまいな高さを競い秋の蝶

東 公子

旅人に昼の灯ともす熟柿かな
紫苑剪る花鋏から古今集
人形を置き去りにして枯野星
冬薔薇の咲ききる力逃避行
石の鳥寒三日月という翼

林 ゆみ

やわらかなラリーを数う十二月
掛け声はいつも自分に葛の花
アシストの自転車ならば山椿
溽暑転た寝ず濡れの母に会う
青鬼灯派手な代車に小さく乗る

馬場 益江

手作りの黄泉壳新聞夕焼欄
カギカッコから秋の陽が洩れて
銀杏降る生前葬のにぎやかに
ころがつて団栗風を書きつなぐ
あんぱん、シヨコラ幽霊のティータイム

普川 洋

屑籠に嵩張る駄句や梅雨の入り
夕涼みリユウグウ星の話など
頼朝の鞍掛松や鯛雲
利根運河の街に行灯秋深む
国力はこの子等次第七五三

馬場 馬子

指笛の風が沖より大根干す
前山は右肩おとし眠りつぐ
木の実独楽打ち合っており心電図
年輪に歪みもあろう大枯木
落葉して溪流の眠い体操

倉岡 けい

花の道非僧非俗の至らずや
梅の香や片道十五分の軌跡
八月や記憶のなかの迷子たち
流れいく岩波文庫麦の秋
灰汁抜けぬ昭和の記憶鳳仙花

林 阿愚林

黄砂降る太古の夕日の匂い連れ
揚げ雲雀少し左が青鞥派
海の墓標飛び魚の翅透くところ
白鷺の声より男こぼれ来て
紅葉ですもんマルトルの恋人よ

羽村美和子

乳臭き生の根源莢の豆
蟻螂に軸脚のあり伏しにけり
檻樓の布揺れる空家に残る柿
新豆腐水に無音の光りあり
秋思やや使わぬ小指屈伸す

野口 京子

生きてこそ愛でる愛でらるヒト・サクラ
我という旅人と行く夏の雲
月の光薔薇ばらバラとこぼれたり
人去りて人影残る冬のペンチ
戦争が好きな星なり我が地球

鳴戸 奈菜

落日にまっすぐ枯れて「く」と曲がる
「ふ」のなかをペンギン急ぐぼたん雪
行く春のヨガ教室に「ぬ」と手足
咳をする「い」の距離にある尿瓶
「む」に詰めた才知は夜汽車の息をする

樋口 博徳

白鳥の身分を落し冬の溝
「明後日から涼しく」予報士連日の弁
老鶯や箸間をこぼれゆく煮豆
氣象異常のあとの涼風城石垣
家族葬済みの知らせに堪えて水を打つ

棗 楢伊

降りやみの秋海棠に揺れすこし
娘のごとき母の遺影や秋灯
ひとりとはもはや空缶秋の風
秋深し改めてみる卓の脚
行けそうでゆけぬ秋思の旅靴

袴田 菊子

虫干しの一ト日を遠き日に遊ぶ
長き夜の星に余生の夢語る
ゆく秋や地下に蠢く活断層
身の老いをしばし忘るる小春風
闇に浮き闇に輝く寒鳥

林 紀之介

あいつが死んでからずっと冬晴れた 三宅たくみ

最愛の、もしくは信頼を寄せていたどなたかが亡くなり、もう何日も空ばかり見ている。冬晴の空は雲一つ無く眩しい程だ。心にぽっかりあいた穴はどこまでも青一色、他には無も映さない大きな穴だ。年齢を経るごとに経験する喪失感。

坂本千恵子

秋刀魚焼く遠い記憶の火吹竹 高桑婦美子 124 4
 折鶴に七十年の日焼あり 浪本 恵子 125 9
 竹の春羅漢の中に若冲像 馬場 馬子 125 10
 基地にへり建国記念日波高し 三苫 知夫 126 2
 一語また一語おぼろへ解けてゆく 馬淵 津枝 126 2
 海よりの風を商う風鈴屋 森 孝子 126 2
 西日濃し缶をこきりと角打屋 細野 一敏 126 3
 拳骨の痛さは今も父の日来 保坂ミエ子 127 4
 昼星の落ちて椿となりゆけり 長井 寛 127 4
 薔薇の夜罪の匂いのふとしたり 石井紀美子 127 6

小池美佐子

寒星を宿すねじ式のマリアさま 木之下みゆき 124 4
 湯豆腐の角がぐらりとぶつかる夜 田村 麗 125 8
 空はうつせ紙風船が舞って出る 荒木 洋子 125 8
 石につまずき山に躓きなめくじり 原島 典子 125 10
 蜥蜴飼う少女のまなこ濁りなき 野口 京子 125 10
 街に灯がともる時までチュリリップ 半田 千枝 126 2
 キリストはほめ上手なりクモの糸 松澤 伸佳 126 2
 追い掛ける背中見えなくなる二月 三好美穂子 126 4
 雨蛙青いセダンに乗り込みぬ 柳本 ゆみ 126 4
 うらけしのつと霊長目ヒト科 山中 葛子 127 6

横須賀洋子

春の蝶生まれる前から斜陽族 白木 暢子 124 2
 石焼芋しらずしず通る松濤町 檜垣 梧樓 125 9
 ねこじゃらし風の縁者と答えおく 羽村美和子 125 9
 三姉妹べんべん草を鳴らそうか なかもと淑子 125 10
 図書室の机にひとりづつ昼寝 前島きんや 126 3
 紫木蓮一步さるたび後ろ髪 元橋 孝之 126 3
 万緑に紛れてからは第三者 村上千代美 126 3
 もの唄めばよき音のして秋立てり 水戸 吐玉 127 4
 屋根裏の詩人静かにお盆です 吉野 精 127 5
 葱坊主わつさわつさと子育て中 イザベル真央 127 6

棗 楢伊

秋深き隣の患者手に句帳 黒川 秀夫 124 2
 八月の六日九日水を呑む 高橋 宗史 124 2
 出る釘になれず叩かれ蛇穴へ 鈴木まんぼう 124 3
 年新た物探しの日々始まりぬ 菅ノ谷文子 124 3
 寒鴉最後はごみになる覚悟 田中つとむ 124 4
 春寒料峭盃がひとつ余る 檜垣 梧樓 125 9
 虻低く唸りて父という孤独 長濱 聰子 125 10
 雑音の中に昭和史ひばり落つ 三苫 知夫 126 2
 老いてこそ大志に生きる雲の峰 柳沢 純 126 3
 ゆうやけを掃き寄せている部活の子 石井紀美子 127 6
 秋深き隣の患者手に句帳 黒川 秀夫

宗史句について付記。二度の原爆投下をさりげなく一括して示し、巧みである。

田端 重彦

はんざきや活断層に耳澄ます 越野 雄治 124 2
 みちのくの沈みきれない紙の雛 高木 一恵 124 4
 小春日や沖で富士引くタグポート 鈴木 房州 124 4
 靖国に誰待つごとく思ひ草 関根 信三 125 8
 雲の峰黙は女の挑戦状 長濱 聰子 125 10
 たまゆらの真原宿に父母祖父父母 松澤 龍一 126 2
 陽炎や象の花子と戯れる 柳本 ゆみ 126 4
 白菜を割れば顕る観世音 井上けい子 127 5
 姥捨の棚田の水の疾さかな イザベル真央 127 6
 百兆の腸内細菌夏旺ん 内田 庵茂 127 6
 はんざきや活断層に耳澄ます 越野 雄治

活断層は過去に地震の示す断層で、今後地震の震源になる可能性がある。私はこの句を深読みして、今年にも市原市の養老川沿いに確認された約七十七万年前〜十二万年前に地球の磁場が逆転した最後の地層だと。地球の歴史を区分する「地質年代」の境界として、国際会議で選定されると「第四期」の中に「千葉期・チバニアン」と呼ばれる地球の歴史に名を残す時代が来る。はんざきがそれを予言している俳諧味のある一句だと・・・

橋口 久子

みちのくの沈みきれない紙の雛 高木 一恵 124 4
 秋刀魚焼く遠い記憶の火吹竹 高桑婦美子 124 4
 決断に強弱のあり鳳仙花 田村 麗 125 8
 書を積みし廊下の暗がり沈丁花 浜名 儀一 125 10
 雲の峰黙は女の挑戦状 長濱 聰子 125 10

花吹雪今日の命の吹き溜る 福田志津子 126 3
 今生の余熱で挑む寒詣で 三好美穂子 126 4
 また辞書に頼る鬱の字梅雨じもり 保坂ミエ子 127 4
 木蓮の白を尽くせし祈りかな 前田 孝子 127 5
 庭師来て空を整へ秋あかね 山崎 幸子 127 5
 みちのくの沈みきれない紙の雛 高木 一恵

3・11の映像が蘇ります。多くの命や思い出までも飲み込んでいった津波。避難誘導をしてきたという、大学時代の友達も攫っていききました。中七の沈みきれないからは、多くのさ迷える魂と、その無念さが伝わってきます。更に下五の紙の雛には、流し雛と重なって胸がつまります。一読で忘れられない一句となりました。読み返す程辛くなりますが、忘れてはいけません3・11。

河合 利枝

双六の上りに母をまたせおり 栃木 きよ 124 3
 椿落つ水の中にも別の生 椿 良松 124 3
 万緑やわたしの中の縁切寺 田村 麗 125 8
 空はうつぶせ紙風船が舞って出る 荒木 洋子 125 8
 折鶴に七十年の日焼あり 浪本 恵子 125 9
 月見草星のひとつを誘い出す 中村 冬美 125 10
 春大根新妻という忘れもの 馬淵 津枝 126 2
 白障子辞儀は静かな刻を生む 藤岡 尚子 126 3
 庭師来て空を整へ秋あかね 山崎 幸子 127 5
 ゆうやけを掃き寄せている部活の子 石井紀美子 127 6
 双六の上りに母をまたせおり 栃木 きよ

正月に年老いた母親を退屈させないように誘った双六。子供の頃家族でした頃を思い出しながら楽しく興じていた。突然、母親が先に上がってしまった、自分が上がるまで待たせることになっ

てしまった。親は子を見守るものだと暖かな思いもあるが、自分が上がるまで付き合ってもらうことになった面目無さの戸惑い。ユーモアを感じさせてほっこり心に残る句でした。

宮川登美子

山彦の手応え青嶺ぐんと寄る 実粕 繁 126 2
 自己主張強くて孤独白つばき 三苦 知夫 126 2
 夏草が主顔して無人駅 望月 彩 126 3
 才能を急死がとざす青嵐 山口 夕紀 126 4
 意に染まぬ物みな染めるか寒夕焼 池田 幸 127 5
 水打つやひと日の怠惰流すごと 前田 孝子 127 5
 梢を越ゆ大むらさきの逃亡劇 伊藤 希眸 127 5
 ゆうやけを掃き寄せている部活の子 石井紀美子 127 6
 太陽は今壮年期青山河 内田 庵茂 127 6
 葱坊主わつさわつさと子育て中 イザベル真央 127 6

末廣 陽恵

菜の花に聞いてみたいが間に合わず 白木 暢子 124 2
 日向ぼこぼんと飛び乗れさうな島 津高里永子 124 4
 ポケットに温もり残り夜の霧 鈴木 瑩子 124 4
 空はうつぶせ紙風船が舞って出る 荒木 洋子 125 8
 春夕べDNAが振り返り 鳴戸 奈菜 125 9
 路を煮る骨が空気を欲しがって 倉岡 けい 125 9
 春大根新妻という忘れもの 馬淵 津枝 126 2
 故郷のふるさといろの青田風 細根 栗 126 4
 影あれば影へと懐く足炎暑 森須 蘭 127 4
 人形を抱く子を抱きぬ芒原 渡辺 澄 127 5

近藤 幸子
 三が日我も我もと嬰抱き 栗山美津子 124 2

夏が来る水平線を引き直し 徳吉洋二郎 124 3
 常連はジープで来る御慶かな 高橋 節夫 124 4
 手花火に戦さ経し顔浮きたてり 千野湘山人 124 4
 立ち尽すのみの少年雛まつり 寺田美津江 125 8
 修正のきかぬ自画像野火走る 富澤さち子 125 10
 望遠鏡のぞけば少年の六月 森村 文子 126 2
 落雲雀散華のごとし震災忌 三苦 知夫 126 2
 切れと間の美のありにけり遠花火 実粕 繁 126 2
 雨蛙青いセダンに乗り込みぬ 柳本 ゆみ 126 4
 立ち尽すのみの少年雛まつり 寺田美津江

障子を開けると、お雛さまが雅やかに飾られている。その美しさに少年は見とれているが、その雰囲気に入り込むことが出来ない小さな抵抗を感じる。女の子のお祝いであることは知っていて、心の中に華やかさを感じているのだが、はにかみを持って、お雛さまの前に不器用に立ち尽くしている。少年期のある瞬間を捉えた、素敵なお句と拝見致しました。

川又 優

硝子切る音も紙裂く音も寒 千葉 信子 124 2
 梅咲いて真澄みの空の怖いほど 椿 良松 124 3
 ポケットに田辺聖子と空蟬と 永井 奈々 125 9
 修正のきかぬ自画像野火走る 富澤さち子 125 10
 蜥蜴飼う少女のまなこ濁りなき 野口 京子 125 10
 読初めは太宰に決めて眼鏡拭く 半田 千枝 126 2
 冬夕焼灰になるまで歩きたし 中山 皓雪 126 2
 どこまでも歩きたくなる芒原 柳沢 純 126 3
 もの囁めばよき音のして秋立てり 水戸 吐玉 127 4
 散骨の海果てしなく冬銀河 井上けい子 127 5

津田沼研究句会報告

(於：津田沼一丁目町会会館)

第三一五回 (平成三十年八月十四日)

司会 横須賀洋子

真夏日の三度三度の白い飯
 屯する少女のひとり横泳ぎ
 終戦忌電気ブランの四杯目
 にわとりを追いかけている日雷
 炎昼の猫の下げくる仏頂面
 猛暑日や甲骨文字のパビブペポ
 台風一過す閑上の蛸は無事なり
 この家の事情いろいろ秋すだれ
 三猿や拳国一致の終戦日
 トマト抱きものくるる友庭先に
 人流れ滝壺となる地下の駅
 誤作動の暑さだお化け引きこもる
 肩車の児も踊りの輪夏祭

白木 暢子
 小林 実
 徳吉洋二郎
 岡田 淑子
 村上 澄子
 池田 博臣
 榎垣 梧樓
 吉野 精
 佐藤 晏行
 なかもと淑子
 金子 未完
 横須賀洋子
 股野 久子

●第三一六回 (平成三十年九月十一日)
 司会 徳吉洋二郎

科挙よりも詩を選びたる十三夜
 スマホ満載総武快速まだ残暑
 更年期だなんて過去蓮の実飛ぶ
 山百合の風に吹かれて疑似家族
 けりつくまで鳴き通すらし夜の鹿
 絵手紙のそら豆青くはじき出る
 広辞苑でんと居座る残暑かな
 菅井きん逝く中村主水が待つてゐる
 秋の空夕フで優しい男想う

吉野 精
 横須賀洋子
 金子 未完
 小林 実
 佐藤 晏行
 岡田 淑子
 村上 澄子
 榎垣 梧樓
 なかもと淑子

葛の花駅へ裏道七曲り
 迎鐘「秩父道場」開講す
 飄々とうら葉のそよぎ秋扇
 潮騒の空港ピアノ夏終わる

股野 久子
 徳吉洋二郎
 池田 博臣
 白木 暢子

第三一七回 (平成三十年十月九日)

司会 徳吉洋二郎

次の海へ船のり挿した赤い羽根
 台風の戸袋の中人の声
 気の病には星月夜と処方され
 台風の目に入ったか採血中
 コスモスをふるわせおりぬ絃楽器
 林檎むく恋の衣を脱ぐごとく
 長寿とは秋刀魚二尾焼き二尾食べる
 人知れず折れてしまった芒の穂
 週末の日本列島濡れ落葉
 秋の海霊安室の十三階
 おんぶばったシーソーゆらすよき日和
 氷頭脛ありありと千年の漠

吉野 精
 小林 実
 金子 未完
 なかもと淑子
 岡田 淑子
 徳吉洋二郎
 横須賀洋子
 白木 暢子
 村上 澄子
 イザベル真央
 佐藤 晏行
 池田 博臣

青葉研究句会報告

(於：千葉市民会館・第五会議室)

第八十五回 (平成三十年八月二十三日)

司会 池田 博臣

月に下駄放る一発の運試し
 夏の夜の運河逆流舌下錠
 鉄塔の脚の屈伸刈田風
 ミズクラゲ生まれてきたのも運だめし
 イカロスの翼を探す大花野

細野 一敏
 越野 雄治
 加藤 法子
 松崎あきら
 長濱 聰子

女運なき輩から籐椅子に
 コスモスに首絞められた昔かな
 トランペット運ぶ夕焼の休校舎
 八月の海に刀身焼け残る
 風神に預ける気運秋つばめ
 汗ふいて運命線を見たり鬼ヤンマ
 ストレスの姿を見たり鬼ヤンマ
 早星モウセンゴケは何食うた
 盆の月こんなところに火焰土器
 ミニトマト運連なるをほほばりぬ
 この頃は運不運あり秋の蟬
 八月のかたちなき影蒙古斑
 「反戦」は日本の国歌諸ふかす
 青蜜柑弾んで失踪する風
 「明後日から涼しく」予報士の連日の言

並木 邑人
 小林 実
 石井紀美子
 矢野 忠男
 長井 寛
 吉野 精
 三須 民恵
 鈴木まんぼう
 細根 栞
 森井美恵子
 山崎 幸子
 池田 博臣
 徳吉洋二郎
 たけなか華那
 棗 楯伊

第八十六回 (平成三十年九月二十七日)

司会 松崎あきら

現し世の思わぬ永さ葛湯溶く
 鶏頭の髪より昏れてゆく時間
 砂が重たくなる九月みんなママが好き
 草の実のとんで飛んで翔んでベガサス
 騙し絵の中に夫ある夜の蟬
 まっ赤な瓜先ピアニツシモの秋
 秋蝶は次の世クラブママとゐる
 十三夜ひよいと貌出す浮世人
 現し世と彼の世の間曼珠沙華
 世渡りは綱渡りです秋の風
 大花野背中合せの死後の景

加藤 法子
 越野 雄治
 たけなか華那
 長濱 聰子
 鈴木まんぼう
 池田 博臣
 吉野 精
 徳吉洋二郎
 長井 寛
 山崎 幸子
 石井紀美子

古稀いまや洩たれ小僧村祭
秋暮色秩父の里はこの辺り
「次世代の機種」と言はれむ秋の昼
原文の英世の手紙もみずれる
世間ずれしたる少女や秋の蝶
見間違う紅葉の中の顔ひとつ
秋扇そりり蠢く共謀罪
穴惑わたしこのごろ不眠症
前世は蛭なる隅照らす人

松崎あきら
矢野 忠男
森井美恵子
三須 民恵
細野 一敏
小林 実
並木 邑人
細根 栞
棗 楯伊

●第八十七回（平成三十年十月二十五日）

司会 細根 栞

糸瓜忌の箸に載る稀飯落ちる稀飯
雁擬き熱し山姥の凄まじ
妻稀に論理的なり星月夜
古稀の秋首から吊す常備菜
ぬくめ酒飲んで齢を希釈する
ふるさとも吾もほどよく老けて秋
あさがおの日の出も仏さんもころんときれ
稀に点入れてもらえて紅葉晴れ
末枯れや百夜通えば赦される
秋のセル金釘流の生残り
山の陽は唐辛子の筵にやさし
なしょんしつべいとど鳴きたき稀勢の里
威統おれおれ詐欺にまだ稀薄
家族愛ひとつひとつの秋灯
木の椅子に螳螂と席同じゅうす
願わくば稀ガス稀元素星月夜
きつと「変身」のザムザだ寵虫

松崎あきら
長井 寛
越野 雄治
徳吉洋二郎
長濱 聰子
細根 栞
三須 民恵
小林 実
矢野 忠男
加藤 法子
並木 邑人
細野 一敏
吉野 精
森井美恵子
池田 博臣
石井紀美子

一遍の遊行いづこや捨案山子
半月の相思相愛傍に星
七味唐辛子掛過ぎ秋深し

鈴木まんぼう
山崎 幸子
棗 楯伊

柏研究句会報告

（於：柏市「ハックルベリー書店」2階）

●第七十五回（平成三十年八月十日）

司会 長井 寛

短夜の長い話に家犬ほゆ
貴婦人のため息からす瓜の花
暗い雨あり「黒い雨」なし原爆忌
雲の峰心耳叫びの鎮魂歌
破れ甲冑羽根ばらばらの油蟬
狂った暑さ女が女を怒る夜
羅や一線越えてしまひさう
磨崖仏の深い懐滴れり
火垂る火垂る一万年の壺を出る
水澄みて魚は忘るる鯉呼吸

伊藤 希眸
下村 洋子
高橋 宗史
小林 俊子
佐藤 鈴子
野口 京子
岡田 春人
井上けい子
木之下みゆき
長井 寛

●第七十六回（平成三十年九月八日）

司会 岡田 春人

秋の蝶畑で受ける電話かな
愁思ゆく石の舟なら石の權
風狂の俳諧の道吟吟す
笑っているような今宵のちろ虫
緋のキャンボードレールの愛した灯
夕暮れて母を探しに吾亦紅
群るほど酒乱めきたる曼殊沙華
草結ぶ子らの残暑のままならず

岡田 春人
下村 洋子
長井 寛
野口 京子
井上けい子
高橋 宗史
椎名 鳳人
伊藤 希眸

芋の露こぼせば兜太に会えるかな
文字挿草宛名不明の印捺され

木之下みゆき
佐藤 鈴子

●第七十七回（平成三十年十月十三日）

司会 岡田 春人

新走猪首の伸びる鬼瓦
さすらひの一茶の背ナに黄落す
糸を引く卵の白身秋あわれ
秋の蚊のくつついてる体温に
月今宵スカイツリーの肩に乗る
流星群ときめきの闇持ち帰る
天高し魔法吹き込む庭帚
十六夜やすり足で佇つ認知症
金木犀いたずらの父探しけり

長井 寛
井上けい子
椎名 鳳人
岡田 春人
野口 京子
下村 洋子
佐藤 鈴子
小張 直子
高橋 宗史

◆平成三十一年度俳句大会◆

◆ただいま作品募集中！◆

締切りは平成三十一年一月三十一日です。
お早めにご応募下さるようお願いいた
します。（詳細は同封チラシをご覧ください。）

◆平成三十一年度「私の感銘句」募集◆

今号で本年度分の掲載は終わります。
来年度掲載文を募集しますので同封の
用紙で奮ってご応募下さい。

ひろば

■受賞のお知らせ

◆第七十三回現代俳句協会賞

句集『星狩』 清水 伶

颯の昏きところを夏の蝶

星狩に行ったきりなり縞臍

たましいを華とおもえば霰ふる

■野田俳句連盟秋季俳句大会開催

九月十六日(日)、興風会館に於いて第一四九回野田俳句連盟秋季俳句大会が開催された。出席者六十二名、欠席投句者二十六名。参加者計八十八名。席題は「実むらさき」。

(高橋宗史記)

【上位入賞者】(三句合点)代表句 ○内は順位

野田市市長賞

月の出を窺っている山椒魚 青木 一夫

野田市議会議長賞

ほんとうは点滅したき烏瓜 佐々木幸子

野田市教育長賞

野良猫の野良をつらぬく星月夜 山村 自游

野田俳句連盟賞

脱稿のまじろみ真夜の茶立虫 三浦 侃

⑤ 猛る天いきなり秋を産み落とす 高橋 宗史

⑥ つなぐ手の亡くして花野一歩ずつ 山中とみ子

⑦ 何しても姉には勝てぬ実むらさき 佐々木京子

⑧ 月光是呪文の一つかすかに毒 諸藤留美子

⑨ 敗戦日手のひらで飲む山の水 保坂 末子

⑩ 朝の露踏んでどつかと生きている 木之下みゆき

■千葉県民芸術祭

第60回千葉県俳句大会開催

千葉県俳句作家協会主催で十月十四日(日)、千葉市民会館にて開催された。当日はジュニアの部の表彰も加わり参加者百七十名の盛大な俳句大会となった。俳句大会に先立ち千葉県出身で俳人協会常任理事の片山由美子氏より特別講演を頂いた。(「真木」一八七号より転載)

◆事前投句の部(雑詠)

千葉県知事賞

聴き流すことも介護や豆の花 増田都美子

千葉県議会議長賞

噴水の頂点といふ弛みかな 東 昇

千葉県教育長賞

遠き日の風に逢うまで草矢打つ 細根 栞

千葉県俳句作家協会長賞

海鳴りは地軸の軋み沖縄忌 徳吉洋二郎

千葉日報社賞

太陽を押して日傘を開きけり 三枝かずを

千葉市観光協会長賞

海市より手紙のやうな白鷗 浪岡 郁子

◆席題の部

席題 「秋風」「守」

千葉市長賞

どこに座しても秋風のくる水辺 増成 栗人

千葉市議会議長賞

身を守る小さき嘘あり唐辛子 山崎 幸子

千葉市教育長賞

秋風や石のみが知る落城史 藤岡 貞夫

千葉市文化連盟会長賞

まつさらな句帳は海へ秋の風 中村 瞳

千葉テレビ放送賞

ため息といふ秋風のやうなもの 浪岡 郁子

*同時に開催されたジュニアの部で、当協会会員加藤法子さんのお孫さんが千葉県教育長賞を受賞された。

もものみはあかちゃんのおしりだね

かとう いろは(小1)

■市原市文化祭俳句大会開催

十一月四日、檜垣梧樓副会長を主選者に招き、市原市文化祭俳句大会を開催した。大会には県内外から五三一句、小中高生徒による

第十回文芸コンクールでは市内外十校から五五四句の応募があり、当日の席題句会は四十八人が出席して実施した。(並木邑人記)

☆事前投句の部

市原市長賞

朽ちてなほ沖向く舟やいわし雲 内田 聰子

市原市俳句協会賞

綱引きの少し動いて天高し 重岡 昌子

市原市議会議長賞

触れるまで葉っぱで居たり青蛙 大澤ひろみ

市原市教育長賞

梨をむく長い手紙を読むように 佐藤 陽子

市原市文化祭実行委員長賞

ホームからホームへの手話小鳥来る 伊東 泰子

☆文芸コンクール／俳句の部

市原市長賞 明神小5年

ソーダ水すかしてみれば友と海 佐藤 優依

市原市長賞 姉崎東中2年

部活動せみに負けじと声をだす 杉 真綾

市原市俳句協会賞 蔵波小2年

よこならびすいかのたねをとばしっこ 高品 夕葵

市原市俳句協会賞 国分寺台中3年

宇治川の浅瀬に集うあゆの子ら 本田 拓夢

新会員・会友紹介

松戸市新松戸 林 みさき(会員)

(推薦者 長峰 竹芳)

降る雪に脈うつやうな間のありぬ

セーターに着替へてよりの我が時間

エスカレーターに人は前向き冬の朝

千葉市緑区 吉田 耕史(会員)

(推薦者 山中 葛子)

我思う故に田螺が歩きだす

夜の凍てを正座して読む抑留記

風鈴に二枚舌などなかりけり

《会員・会友の近況》

・〈朝な夕な読経に外す貝風鈴〉三月に夫を亡くしました。話し相手のない生活がなんと侘しいものか。般若心経を唱えることによつて亡き夫との交流をはかることがなくさめとなつております。

幾つになつても目標をもつて生きる姿を好んでいた亡夫でしたので、天涯孤独になつても俳句と詩吟を続けて行きたいと思う毎日です。(中山 皓雪)

・權と奥坂との類句騒動ははるか過去のこととなつたが、稔典先生の「俳人漱石」岩波新書によれば漱石の「叩かれて昼の蚊を吐く木魚かな」は「叩かれて蚊を吐く昼の木魚かな 東柳」という句が江戸時代にあつて漱石の句は中七の言葉を入れ替えただけという。これは類句なりや盗作なりや。本歌どりというのもあつて才なき者には悩ましい。(高橋 節夫)

・七十五歳にして穂高岳を登攀しましたが、自信は過信と考へて今年から楽な登山を楽しんでいます。毎年一回は海外旅行の仲間と旅しています。今年六月にスイスアルプスの名峰を訪ね、トレッキングを楽しんで来ました。二十三年前に同じ名峰を訪ねた写真を持参して比較しましたが、残雪は少なく氷河の後退が著しい事を確認しました。地球温暖化の影響は想像以上で、今夏の猛暑続き等もその一環だと痛感しました。(田端 重彦)

・この四月から現代俳句協会の出版部部長の任を負わされ、とまどいの毎日です。本作りは好きなのですが、ボランティアとはいえ、責任のある仕事ですので、能力以上ががんばらなければ、などと気だけは一人前

です。
(津高里永子)

・当コーナーへの皆さんの寄稿、毎号楽しみにしています。暫くお会いしていない人、お会いしたことの無い人の近況や俳句への取組みを知り、非常に身近に感じさせて頂いています。
(徳吉洋二郎)

・この夏の猛暑にはこたえましたが、現俳先輩の皆様方の年齢を思えばもう少し気合を入れ、来春の米寿に向けて気張って行こうと思っています。
(畠 淑子)

・十月に野田俳句連盟の吟行会で茨城県利根町へ行つて参りました。真冬の様な寒さに、雨も降り出し散々でしたが午後は雨もあがり充実した一日となりました。

十一月は文化祭で春秋季大会の二十位迄の作品展示。利根町の吟行会の作品展示と何かと忙しい毎日です。
(倉岡 けい)

・昨秋交通事故に遭いやつと一年経ちました。現在は比較的元気に過ごしています。

不勉強ですが、余生を楽しみに俳句に近づきたいと思うこの頃です。
(袴田 菊子)

・八十半ばを過ぎた杖をたよりの身、家で空を眺めては一句。ポストまで行つては一句。友人と会つては一句。という眩きの一句をお送り致します。
(林 紀之介)

◆ ホームページのご案内 ◆

インターネットで「現代俳句協会」を検索「地区活動」「北海道・東北・関東」を開くと千葉地区の活動、会報がご覧いただけます。又、ここから千葉県の掲示板にリンクしてあります。
一度ご覧いただき俳句に興味ある方には是非紹介して下さい。

掲示板

《会員・会友異動》

- 逝去 (会員) 鈴木和子、松沢貞津
- 入会 (会員) 土元裕一
- 移転 (会員) 菅ノ谷文子 (野田市小山へ地区内移転)

《平成三十年第三回幹事会》

日時 平成三十年八月二十八日(火) 午後六時より

場所 船橋市勤労市民センター

議題

- 一、秋の吟行会について
- 二、第一三〇号会報について
- 三、現代俳句協会(本部)の動向について
- 四、関東甲信越静ブロック連絡会議について
- 五、都区・多摩地区三十五周年俳句大会報告
- 六、平成三十一年度総会・俳句大会について
- 七、創立四十周年記念事業について

- 八、研究研修費の使い道について
- 九、各研究句会の状況について
- 十、その他 ①会員・会友の入退会状況 ②次回幹事会(十一月二十七日) ③その他

□ □ 事務局・編集部だより □ □

● 平成三十一年度総会・俳句大会が平成三十一年三月十七日(日)に開催されます。たくさんの方のご参加をお待ちしています。ご予約下さい。

● 今年最後の会報となりました。皆様には何かと協力賜り有り難うございました。来年度も皆様に親しまれる会報の発行に努めます。どうぞ良いお年をお迎えください。
(事務局・編集部一同)

<p>現代俳句千葉 第一三一号 平成三十年十二月一日発行</p> <p>発行人 千葉県現代俳句協会 会長 秋尾 敏</p> <p>現代俳句千葉編集部 〒261-0004 千葉市美浜区高洲 三十五-6-1602 徳吉洋二郎</p> <p>千葉県現代俳句協会事務局 〒278-0043 野田市清水五 高橋 宗史 TEL・FAX 〇四一七一二五-三三八二</p>
--